

原田 敬美 (ハラダ ケイミ)

博士(工学)、技術士(建設)、一级建築士、前港区長

前号で紹介した海外の事例を参考に、日本での女性の社会参画の前に立ちはだかる課題とその課題を突破するための方法について提案します。



1 女性人材の供給源の充実、性別でなく能力、適性で進路の選択

社会で多くの女性が活躍するために、女性人材の供給源を拡充する必要があります。大学、専門学校、高校など各段階で社会への女性人材供給源として女子学生数を確保する必要があります。男だから、女だからと言ったバイアスをなくす子育てをしましょう。

2 指導者の意識改革、古い価値観を捨てさせる

最近のニューヨークタイムズはローマ字で「rougai」(老害)と、高齢男性が社会を牛耳り女性を疎んじていると日本社会を批判しました。女性は後ろに引つ込んでいた古い価値観の男性指導者たちの意識改革をしなければなりません。ダメなら排除かな(…?) 最近のオリンピック委員会会長を辞任した森さんの例があります。男性指導者の意識改革を要求しましょう。

3 定時退社、家庭ファーストのワークライフバランスの実現

突然の残業は、子育て中の夫婦には特に困ります。50年前、スウェーデンとアメリカでインターンを務めましたが、勤務員全員17時に帰宅しました。働き方改革で残業をなくし、時間通り帰宅し、家事、育児、地域活動などができるようにすれば、女性も安心して働けます。指導者層の意識改革が必要です。定時退社を要求しましょう。

1980年代、後輩が英国石油に転職しました。ロンドンに到着後、直ちに出勤したら「奥さんが引越しの整理や子供の入学手続きなどで大変だろう、家族を大切にしろ、1週間会社に来なくてよい。」と叱られました。家族を大切にする職場づくりを要求しましょう。家事は、男女平等に分担しましょう。オランダの住宅環境省を90年代視察しました。保育園が庁舎内にあり、育児中の労働者にとり支えとなります。日本でも大組織は職場内に保育園を設置するよう要求しましょう。労働組合の委員長みたいな発言でしょうか？

4 女性が参加しやすい社交方式の改革

日本の社交方式は、男中心の接待ゴルフ、ナイトクラブ、料亭、キャバレーです。女性はこうした社交に参加できません。欧米にはこうした社交方式ではなく、ランチミーティングやホームパーティーで家族ぐるみでお客様と食事し社交します。学校や職場ではビールやワインを片手に立食で気楽なパーティです。酒を注いだり注がれたりはありません。

幹部が、女性の立場に配慮し率先し社交方式を変え、組織内で社交方式の改善の宣言をするよう要求しましょう。また、女性が安心して働くためにトラブル防止の仕組みを構築しなければなりません。パワハラ・セクハラのない職場づくりを要求しましょう。

5 人事で女性に対する配慮

女性が働きやすい環境を整備した上で、意欲ある女性を積極的に採用すべきです。欧米では、求人広告に「女性の積極的な応募を期待します。」と書かれています。私が総理になつたら即実践します！

「なに夢見ているんですか!!」とヤジで目が覚めた。

2021年6月

今月のテーマ

I 生命保険は
遺産分割対象外である

II 村上和雄先生が遺した
人を健康にする「笑い」の研究

III 女性の社会参画
日本での課題と提案～その2～

想いをのせて 感謝 ありがとう

新型コロナウイルスの感染拡大により1年延期され、海外からの観客受け入れを断念するという状況の中、東京五輪・パラリンピックの開催が間近に迫ってきました。今、様々な意見がある中、関係者は懸命に努力を続けています。1964年の東京大会の際に、競技成績の速報と公式記録の収集作業をコンピューターで支援するリアルタイムの競技速報システムが開発されました。インターネットもスマートもない時代、日本のIBMの技術者たちの活躍があったのです。それ以前の大会では公式記録の確定までに数か月を要していたのですが、これによって速報を伝えることができるようになりました。大手銀行は、このシステムを基に開発されたオンライン勘定システムを日本で初めて導入し、窓口対応のスピードアップなどの効率化を実現しました。この成果は銀行ビジネスを抜本的に変えることにつながったのです。今大会では、世界最高水準のテクノロジーが活用されるということです。前回の東京大会が終戦からたった19年で復興を遂げたことを世界に向けてアピールしたその1つが、“夢の超特急”新幹線であり、首都高速道路やモノレールだったのです。2020五輪がこの困難な状況の中で開催されるということは「日本という国の宿命」ではないかと思えてなりません。先の東京大会は戦後の復興を世界中の人々が驚き、その人たちも日本から元気をもらつたのです。今回も未曾有の事態での開催が、これからの「共生社会への変革」に繋がり「世界に届けるTOKYOモデル」となるのではと思えます。この大会を国民がどれだけ前向きな気持ちで迎えるかが重要なのではないでしょうか。

I 生命保険は遺産分割対象外である

昭和40年2月2日の最高裁判決で、契約者と被保険者が同じ人の生命保険契約は、亡くなった方の財産から分離されると示されました。

生命保険は受取人固有の財産ということです。

受取人がもらったのは**生命保険請求権**なので、**相続財産**にはなりません。遺産分割協議が不要となり、遺留分侵害額請求権の対象外となります。ご注意いただきたいのは、**相続人間の財産の偏り**です。平成16年10月29日の最高裁判決で、長男だけ3億円の保険金を受け取ることは兄弟間の著しい不平等であり、許されないと示されました。

この判決は、生命保険は遺産分割対象外であるのと同時に、**受取人に財産の偏りが出た場合遺留分侵害請求**があれば生命保険は**特別受益**に入れますと言っています。

もっと詳しく知りたい方は麻田までご連絡下さい。



会社へは 来るなど上司 行けと妻

信頼と実績で皆様に愛されて35年！

生命保険・不動産の売却・買い取り すべてお任せください！

株式会社
オフィス ASAEDA

代表取締役 麻田 春江

住所：〒302-0015 茨城県取手市井野台1-7-28 E-mail : officeasada220@gmail.com
TEL : 0297-72-2401 FAX:0297-72-6217 URL : <https://officeasada.com>



// 村上和雄先生が遺した 人を健康にする「笑い」の研究



筑波大学名誉教授の村上和雄先生が2021年4月13日、逝去なさいました。

村上先生は、遺伝子工学の世界的権威として高名である一方、遺伝子を研究する中で、その構造や働きが偶然に生まれることはあり得ず、「人智を超えた偉大なる存在」なしに到底説明はできないという結論に至られました。

先生がそれを“サムシング・グレート”と名づけたことで、その呼称は世代を超えて広く知られるようになりました。生前の偉大な功績は、後世にいつまでも語り継がれることでしょう。人間の魂についても深く研究されていた先生のご冥福をお祈りし、大変人気の高かった連載から一部をご紹介いたします。

笑いには「医力(いりよく)」がある——。

医学博士の高柳和江さんと、4月13日に逝去された筑波大学名誉教授の村上和雄先生は、そう提唱されました。医学と遺伝子工学、異なる見地から放たれる「笑い」の知られざる効用に目を見開かされると共に、笑顔でポジティブに生きる大切さを教えられます。ユーモアを武器に、力強く朗らかに生きたいものです。

笑いによってONになる遺伝子

〈村上〉

ストレス社会と言われて久しいですが、私はストレスにもポジティブ・ストレスとネガティブ・ストレスがあると思いました。

問題にされているのはネガティブ・ストレスで、それが加わると血圧や血糖値が上がったりする。では、喜びとか感謝とか、笑いとか、ポジティブなストレスを加えたら下がるのではないかという仮説を立てたんです。

こういうことを考え始めた時に、偶然吉本興業の社長に会うんですよ。

〈高柳〉

ご縁ですね。村上先生が吉本興業と組んで笑いが体に与える影響を調べられていたのは、私は本当に画期的なことだと思っていたんです。

〈村上〉

実はそれまでは、吉本なんて全然見たことがなかった(笑)。だから、すべては偶然の出会いから始まったんですよ。

〈高柳〉

あれはいつ頃から始めたのですか。

〈村上〉

2002年ですね。みんな、遺伝子と吉本なんてミスマッチだと思ったはずですが、そうじゃなかつたんですね。

まず、笑いによって血糖値が下がると仮定して、糖尿病のお医者さんのところに「こういう実験をやりたいんです」と相談に行ったら、ほとんどのお医者さんから「それはちょっと……」と断られました。

私の教え子の関係で半ば無理やり協力してもらって実験を開始しました。

〔中略〕

対象は糖尿病の初期の患者さん二十数人です。1日目は軽い昼食後、大学の先生による「糖尿病について」という講義を聞いてもらいました。

すると、食前に測った血糖値よりも、平均で123ミリも上がったんです。上がる人は200以上も上がった。これは予想以上でした。だから、血糖値の高い人はつまらない話を聞いたりダメなんですよ(笑)。

2日目も同じ昼食を取ってもらった後、同じ時間から漫才を聞いてもらいました。そうしたら笑いによって平均77ミリ下がっていたのです。

〔中略〕

こういう結果を発表し始めると、最初は「そんなアホな」と言っていたお医者さんたちもおもしろいと言い出して、その後、4万個の遺伝子を調べることに成功しました。

それで分かったことは、やはり笑いによってONになる遺伝子とOFFになる遺伝子があるということ。私はそうに違いないと思っていたし、みんな楽しいことをすれば体の調子が良くなるということはなんとなく感じていた。

しかし、我々は科学者ですからね、それをデータとして裏づけができたことは大きかったです。

人生は悲劇ではなく喜劇だ

〈高柳〉

私は自己効力感が非常に大切だなと思っています。自分のことを好きになって、自分が生きていることに価値があるんだと自分自身がしっかりと納得して、人生を歩んでいくことが大事。

お互いに相手のいいところに気づいて伝え合うことによって、笑い合い、一人ひとりの自己効力感を高めていただきたいと強く思っているんです。

〈村上〉

しかし、我々の世代にはちょっと練習がいるかな(笑)。家内なんか急に褒めたら逆に怪しまれる。何か下心があるんじゃないかなって(笑)。それに相手のいいところを見つける努力も必要ですね。ボヤつとしていたら見つけられない。

〈高柳〉

確かに、ワークショップの初日、家に帰って家族を急に褒め出すと驚かれるらしいです。「どうしたの!?(笑)」

〔中略〕

〈村上〉

笑いやユーモアは人生を潤すものであることは間違いないと思います。それはやはり人間関係の中で生まれるものだからでしょう。一人笑いはあるけど、一人ユーモアというのはないからね。人間関係を円滑にするものだと思うし、偉い先生も同じ話題で笑っていると、ああ、人間は本質的には同じなんだなと感じます。

〈高柳〉

私は笑いもユーモアも一人でもできると思っているんです。

ある本の中で、軟禁されているアウン・サン・スー・チーさんが「一人でも結構笑いますよ」と言っていました。例えばコップを落とした時、「私、落としちゃった。ははは」と。

私も一人でいる時にちょっと失敗して「あら、やっちやった(笑)」と言うことがあります。そういう時に、「ああ、大変」「なんでこんなことに……」と思うか、「あ、やっちやった(笑)」と思うかで、次の行動が違ってきますよね。

人生、どうせいろいろなことが起こるなら、どんどん笑ってしまえばいいですね。私は、人生は悲劇ではなく喜劇だと思いますから、結局なんでも笑い飛ばせばいいと思っています。

〔中略〕

〈村上〉

私の師匠の故・平澤興先生は「一流の人はみな明るい」と言いましたが、確かにそうですね。ドライ・ラマも本当によく笑うし、ユーモアがある。

〈高柳〉

どんな状況でも笑って生きていく。それが私の人生訓ですが、悲しい時も病の時もいつも笑っていけば、自然と心も体も元気になります。そういう人が増えていけば日本はもっと明るく元気になるはずですよね。

〈村上〉

人間は、まだ多くの遺伝子が眠ったままでスイッチがOFFになっています。一つでも二つでもスイッチがONになったら、もっともっと能力を発揮できる。

何せ人間の遺伝子には38億年の歴史が組み込まれているんです。何度も訪れた絶滅の危機を乗り越えて、私たちはいまここに生きているのですから、百年に一度の不況などに負けてはいられないですよ。

人間の可能性は無限です。一人でも多くの人が笑いとユーモアによって遺伝子のスイッチをONにして生きていってほしいですね。

～あとがき～

「人間学を学ぶ 月刊誌 致知」に許可を頂き掲載しています。村上先生は世界で初めて高血圧の「黒幕」であるレニンの全遺伝子の暗号解読に成功され、世界的な業績として注目され、研究者として大輪の花を咲かせました。この「致知」は書店では販売していない年間購読制の月刊誌です。世の中にはすばらしい方が沢山いらっしゃいます。もし興味のある方は、インターネット又はお電話(03-3796-2111)にて直接お申込み下さい。その際、申込動機に「麻田春江」からの紹介とお伝えください。

